『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

浄土の歌

渡辺郁夫

資料の方はホームページでアップしておりますので、見ていただければと思います。雑誌に連載している記事です。そこに最近、連続して四天王寺のことを書いております。大阪に四天王寺がありまして聖徳太子が最初に開かれた寺として有名です。今年の夏にそこに行きまして、すでにそのことを三回ほど書いています。今日はまず、これから書いていく記事の予告編をお話してみたいと思います。

『歎異抄を読む』という本を五年前に出しました。これは結構、反響がありまして、今でも電話がかかってきて「よかった」と言っていただいて、私としては喜んでおります。その本を出した関係で広島の雑誌に連載記事を依頼されました。それがこの夏、二〇〇四年八月号で六〇回になりました。五年間は書こうと思っていましたので、よ

く五年もったなと思ったわけです。後で気付くのですが実はこの六〇という数字に意味があったんです。

ちょうどこの夏に大阪に出張があり、四天王寺の極楽門を見たいと思い、訪ねてみました。四天王寺の門は南の門もありますが、有名なのは西を向いた極楽門です。西向きの極楽門に、春分の日と秋分の日に真西にお日様が沈むわけです。浄土教に日想観がありまして、沈む夕日を見て浄土を思い、如来のことを思う行があります。四天王寺は聖徳太子をしのぶお寺でもあり、浄土をしのぶ寺でもあるということです。そこに行って、記事が続いたのは敬愛している太子のおかげだと思い、お参りをしようと思ったのです。極楽門は立派な門ですが、そこに大きな親鸞聖人の像が建っていまして、実に立派な像でした。親鸞聖人を記念する堂まで四天王寺はつくってくれていました。そこを見学した後、境内をめぐったわけです。

四天王寺は古いお寺ですが、同じく聖徳太子が立てられた法隆寺と比べると大きな違いがあります。法隆寺は一回焼けております。昔は再建説と非再建説の論争があったんですが、今は再建説に決着したと思います。それでも非常に古いお寺です。夢殿

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

には救世観音像があります。明治まで秘仏だったんですが、五〇〇メートル近い布でぐるぐる巻かれていたのを岡倉天心とフェノロサが政府の命令だと言ってとりまして、今は年二回、公開されています。そういう有名な仏像があります。私の勤めている学校の図書館にこの仏像の写真が飾ってありまして毎日のように見ております。いい仏様だなと思っておりました。たまたま縁がなくて法隆寺で見る機会はありませんでした。

四天王寺の建物は残念ながらコンクリートです。奈良や京都のお寺と同じじゃないと分かります。今回の戦争で焼けましたし、その前も何度も焼けて再建されました。創建時から見れば全く新しいお寺になっているわけです。そういう意味では期待感がもてないというと失礼ですが、新しいコンクリートの建物です。その中の金堂に聖徳太子を写したという救世観音像が置かれています。

その像を拝んだ瞬間、非常に不思議な気持ちになったんです。私は特別感激屋ではないし、偶像崇拝の否定の気持ちが強い人間ですし、仏像をそんなにありがたがることはない人間なんです。ところが四天王寺の救世観音像、まだ新しく金色に光ってい

ますが、それを見上げた途端、眼差しというか、視線に射すくめられたようになって、何とも不思議な気持ちになりました。その時の私の気持ちをユーミンの歌で代弁してもらおうと思います。昔から大好きな歌です。松任谷由実に「不思議な体験」という歌があります。これをまず聴いていただこうと思います。

（「不思議な体験」）

僕の好きな曲なんですけど、ご存知の方ありますか。手を挙げてみてください。ご存じないですか。皆さんが生まれられた頃の曲ですからね。ユーミンの歌の中で特に好きなのがレジュメにあげた曲です。その中でもこの曲と「空と海の輝きに向けて」が好きで、私が思うに親鸞浄土教のテーマソングだと思っています。本当に気持ちがぴったりくる曲です。「不思議な体験」で「遠くであなたが見つめてる、いつでもこころを送ってる」と言っていますが、この「あなた」は、浄土教でいうと阿弥陀仏、如来にあたるわけです。それを感じないわけではないんですが、四天王寺で救世観音像を見た時に、まさにこの感じでして、この視線がずっと私を見つめていたという気

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

持ちが強くしたんです。あまりにその印象が強かったので、しばらく佇んでいた後、お寺の回廊をめぐりながら、どうしてこんなに強烈に感じるんだろうか、何か非常に大きなメッセージをもらったような気がしたんです。

広島に帰りまして、親鸞と聖徳太子の関係をもういっぺん考え直したいと思ったんです。親鸞は聖徳太子と京都の六角堂で夢告があって出会ったと言われますが、その時の気持ちと、聖徳太子と言われる観音像の目を見つめた時の私の気持ちは、すごく似ているのではないかと、そういうふうに思ったんです。勝手な思い込みですが。それまで聖徳太子を敬愛していると言いましたが、どちらかというと、親鸞聖人の書かれた御和讃とかを通して、親鸞経由の聖徳太子とのつながり方でした。今回はそれを抜きにしてダイレクトにぶつかる、飛び込んでくる感じがしまして、ようやく親鸞と聖徳太子との関係が本当にわかったような気がしたわけです。

そこから今まで疑問に思った点で、考え直してみようということがありまして、いろいろ見ていきました。今まで漠然と感じていたものの中で、発見というと大げさですが、これは大事な点だと思えることがいくつか出てきたんです。それをお話してみ

たいと思います。最初に数字を書きます。一、六〇一、一二〇一、一二六一、一五六一、一八〇一、一九二一、一九八一。これは紀元から始まりまして現代までの、ある年なんです。皆さんが生まれたのはこの辺、一九八一年以降だと思います。ユーミンの曲もこの辺です。八〇年代だと思います。この数字の間に何か共通点が見えますか。ごらんになってすぐに気がつくのは下一桁が全部1です。これはすぐ気づかれると思います。その次がちょっと難しいかと思いますが、こう考えてみてください。六〇一以降で数字同士の差を見ると六〇〇、六〇、三〇〇、二四〇、一二〇、六〇と来ています。これは何を意味するか、おわかりでしょうか。来年の干支は酉ですね。来年の数字を入れると二〇〇五で、一九八一との間が二四。その前が六〇の倍数で、ここが二四ということはともに一二の倍数ですから、干支としては全部一致する。全て酉年です。酉年は一二年に一度回ってきますから無数にあります。さらに六〇年に一回回る酉年がある。聖徳太子とか親鸞のものを読まれると気づかれると思いますが、こういう年があります。辛酉（しんゆう）。六〇年に一回辛酉があります。

これがごろ合わせ的に考えると浄土教に関係してきます。酉は西に似ていますが、

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

もともとは同じだったと言われています。一二支を方角に配当すると酉は西になります。辛は五行で木火土金水の五行に方位の配当があります。風水とかお好きな方はご存じだと思います。辛は金で方位では西です。六〇年に一回回る辛酉は、酉は西、辛も西です。西と西がぶつかるの辛酉です。その年を幾つか数字として並べてみたんです。親鸞という名は天親菩薩と曇鸞大師から採られたと言われますが、「鸞」という字は鳳を意味し、酉から想像された鳥だそうです。

前から気になっていたことがあって、一二〇一年は真宗にとって大事な年で、京都の六角堂に親鸞聖人が悩みの末に籠もられて聖徳太子、観音様のお告を受けられたという有名な年です。「雑行を捨てて本願に帰す。」これが辛酉の年です。『教行信証』に書かれています。親鸞聖人にとって大きな出発点だったと思います。一二〇一年は親鸞聖人が法然上人のところに行かれた年で、浄土家としてのスタートが始まった年だと思います。

その六〇年後の辛酉の一二六一年、その時、親鸞聖人は八九歳です。亡くなられたのは次の年、一二六二年です。浄土家としての親鸞聖人の活動は辛酉から辛酉の間の

六〇年間です。不謹慎なことを考えて、八九歳で亡くなられるとぴったり辛酉ではないかと思うのですが、次の年に亡くなられた。ところが次の年に亡くなられた関係で、あることが起こる。次の数字の一五六一年は親鸞聖人が亡くなられて三〇〇回忌です。一二六二年に亡くなって、一五六一年がなぜ三〇〇回忌になるか。仏教では亡くなられた年に二九九を足した年が三〇〇回忌です。ですから一年前に三〇〇を足すわけです。さらに一五六一年に三〇〇を足すと一八六一年、幕末の混乱期ですが、宗祖の六〇〇回忌です。二一六一年は九〇〇回忌です。親鸞聖人は辛酉の年に縁があります。

三〇〇回忌の一五六一年のころは一向一揆とか石山本願寺の戦いとかがあったころで真宗にとっては非常に苦しい時です。

一八〇一年はおかるさんが生まれた年で、辛酉の年です。おかるさんは奇妙な縁だと思いますが、辛酉というのは方位に配当すると西の西だと言いましたが、おかるさんが生まれたところは本当に西の果てなんです。下関の沖合に六連島がありますが彼女はそこで生まれました。本州の西の果てです。

一八六一年は幕末の混乱期で、続いて明治の廃仏毀釈がきます。その時に六〇〇回

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

忌です。大きな節目です。

一九二一年、何があったか。親鸞との関係では、西本願寺の宝庫で親鸞の奥さんであった恵信尼公の手紙が見つかった年です。これも辛酉です。恵信尼文書が七〇〇年隔てて見つかったのです。親鸞に聖徳太子の夢告があって、法然上人のもとに行きなさいということと、結婚しなさいということを言われた。「行者宿報の偈」と言われていますが、観音があなたの妻になるからあなたは結婚しなさいという夢告を受けた。その年からこんなに離れてそのことを書いた手紙が突然発見されたんです。同じ辛酉の年です。しかもおもしろいのは発見したのが鷲尾教導という鳥の名を持った方です。

一九八一年は少し後に回して、その翌年一九八二年。皆さんにとっては大事なことだと思いますが、皆さんは、「みすず世代」だと思ったんです。子どもの時、金子みすずの詩を読まれた世代だと思います。それが可能なのは皆さんの世代からなんです。それ以前の世代は子どもの時にみすずの詩を読むことは不可能でした。なぜかというと彼女の詩が発見されていなかったんです。矢崎節夫先生という彼女の歌を熱心に探された方がいて、この方が一九八二年に彼女の詩を発見されたんです。その前の一九

八一年はだいぶん収まったので言っていいと思いますが、こちらの宗門に関係します。お東紛争があって、新しい宗憲ができて、新しい門首制ができた、お東にとっては大変揺れた年です。これが辛酉の年です。

前に戻って、六〇一年は何か。『日本書紀』で聖徳太子が斑鳩の宮を建てられた年です。これが斑鳩寺、法隆寺になりました。聖徳太子は六〇一年の辛酉の年を選ばれて斑鳩寺を建てられたのだろうと言われています。どうして辛酉の年に建てるのか。斑鳩も鳥です。聖徳太子は飛鳥文化をつくられた。飛鳥は地名ですが、『万葉集』の「飛ぶ鳥の」という枕詞からできた言葉で、これも鳥です。鳥に縁があるから辛酉の年か。確かに酉に縁はありますが、もっと重要なのは、東洋史では辛酉という年は革命の年だと言われています。中国に讖緯（しんい）説というのがありまして、辛酉革命ということを言います。これを聖徳太子は意識しておられて、辛酉革命の年に斑鳩宮をつくられたと考えられる。これ以降まさに革命的な施策をなされていくわけです。

太子関係で大事なのはもう一つ、甲子の年があります。この年が讖緯説で言う革令、法令が変わるという年です。これが六〇四年です。真宗の聖典にも入っていると思い

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

ますが、「和を以て貴しとなす」で有名な「十七条憲法」の出された年です。これが革令の年です。太子の中では辛酉の革命と甲子の革令はセットで意識されていたと思われます。

『日本書紀』で神武天皇の紀元は六〇一年を基準にして出されています。辛酉は六〇年に一回回ってきますが、それを二一倍した一二六〇年を一蔀（いちほう）と言いますが、一二六〇年に一回、大きな国家的な変動が起こると言われていたんです。革命は中国では起こるんですが、政治的な革命は日本ではあってはならないことです。朝廷がひっくりかえることになりますから。だから日本においては革命は一回しかないはずだということで、六〇一年から一二六〇年さかのぼり、そこが神武即位の紀元となったんです。紀元前の天皇の代は非常に長くなっていますが、辛酉革命説のせいなんです。これを聖徳太子は意識されていたのだろうと思います。『日本書紀』が太子の辛酉を算定の基準にしていますから、辛酉革命は聖徳太子の頭の中にあったと思われます。

それと真宗のいろんなことがちょっと符合しているように見えるんです。不思議な

話ですけど。もっと言いますと、一九二一年、恵信尼公の手紙が突然出てきた。西本願寺で発見された。恵信尼公の出身はご存じですか。一度恵信尼公関係の本を読まれるといいと思いますが、三善為則の娘、三善氏の出身です。奇妙に符合するんですが、日本で辛酉革命を強調したのは平安時代の三善清行という人です。彼が辛酉革命を強調して、本当の革命は起こったら困るので、そのかわり元号を変えようということで、九〇一年が延喜元年となりました。それ以来辛酉の年は大体、ほとんど改元しています。辛酉の年は元年となります。親鸞聖人の時も一二〇一年は「建仁辛の酉の暦」と『教行信証』に書かれています。その辛酉革命を強調したのは三善清行です。恵信尼公の出身の三善氏とその人がつながるかどうか、よくわかりません。最近出ている本では恵信尼公から三善為康までは遡るだろうと言われています。平安時代に三善為康という人がいて往生伝を二種類書いていますが、そこまでは遡るだろう。それから前に遡るかどうかはわかりませんが、偶然ですが、三善氏の出身である恵信尼公の手紙が辛酉の年に出てきたんです。さらに興味深いのは恵信尼公の手紙が出てきた一九二一年は、今基準としている六〇一年から一三二〇年後です。一部は一二六〇年と言い

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

ましたが、三善清行は実は『革命勘文』というものの中で一蔀を一三二〇年としたんです。奇妙な一致です。

これらをいろいろ考えていて思ったことがあります。今、ここにならんでいる数字を、もし計算式で出そうとするとどういう式ができるか。$y=60x+1$。一次関数です。六〇一年の斑鳩宮はxが10ですが、おもしろいことにこの式にはその六〇一という数字が出ているんです。以下、xの数字が入っていきます。最初は辛酉革命の時にいろいろ起こるので、親鸞関係だけかなと思ってたんですが、考え直して、浄土教全体に関係があるのではないかと思ったのです。源信和尚とか、法然上人とか一遍上人とか浄土の祖師の方々がおられます。何人もおられるのでこの式と関係があるかどうか見てみようと思ったんです。

日本で浄土教が盛んになった理由をご存じだと思いますが、末法思想です。一〇五二年、永承七年が末法元年と言われた。このへんから浄土教熱が盛り上がってくる。一〇五二年の前から計算してみたんです。xが17～20で並びます。一〇二一、一〇八一、一一四一、一二〇一、こんな感じで並んでいきます。源信、法然、親鸞、一遍と

かほとんどこの間になっていきます。今、出してきた、yのもとになっているxの数字を見て気づかれることはありませんか。『無量寿経』をごらんになられている方だと、あっと思われると思います。本願の数字、親鸞聖人とか平安、鎌倉の浄土の祖師たちの重視された本願の数と一致するんです。十七願から二十願で、有名なのは十八願です。親鸞聖人の『教行信証』の中で大事なのはこの四願だと思います。十七願は名号を唱える「諸仏称名の願」。十八願は「至心信楽の願」。三願転入という親鸞聖人が本願の中で自分の歩まれたコースを振り返られる、その三つが十八、十九、二十願です。ここと不思議に数字が一致していくんです。

ここから先は私の勝手な解釈ですが、ずっとこういうことが言えるんじゃないかと思って見ていくと、奇妙に符合していくんです。y＝60x＋1という聖徳太子から始まった式が、日本の浄土教を考えて行く上で、奇妙な符合を見せていくんです。

例えば四十八願の中で、変な願文があるなと思っていたところがあって、二十六願に「得金剛身の願」がある。浄土でどうして金剛力士のような体が必要なのか。変な願だなと思っていたんですが、先の式に26という数字を入れてみると、一五六一で宗

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

祖の三〇〇回忌です。xが26になる。この頃、一向一揆や、石山本願寺の戦いとか真宗は厳しい試練の時を迎えています。彼らは西暦の計算は知らないはずなんですが、戦いの最中に丁度、そこに符合するように金剛身を得る願が出てくる。

何か普通じゃないなという気がして、いろいろ考えまして、これは全くの私の独断ですが、聖徳太子から始まる $y=60x+1$ の式は四十八願と対応していて、四十八願そのものが一種の浄土教の歴史書であるとともに、これからのことを言っている未来書になっているのではないか、浄土史観を表しているのではないか。聖徳太子は未来記と関係があって、未来のことがわかる人だと聖徳太子関係の伝記には出てきます。それで聖徳太子の未来記が偽作されたりするんですが。四十八願もこれは聖徳太子の未来記ではないかという思いがちょっとしたんです。未来記というと予言の書のように聞こえますので、予言というより計画書ではないか、浄土の救済計画ではないかと、だんだん思ってきました。四天王寺で救世観音像を見た時、ずっと見つめられていたような気がしたと言いましたが、それはほんとにちょっとやそっとの長さではなく、ずーっという印象があって、あまりに印象が強烈で、多少、私も混乱したところがあ

るんですが、それをきっかけに、見直していったら、いろいろなことが符合するので、ひょっとしたらという気になったんです。私の勝手な思い込みで、ばかばかしいと言えば、ばかばかしいんですが。『無量寿経』の本願をそんなふうに浄土教の計画書として見ることは邪道だと言われるのは承知なんですが、私としては何か不思議な見えない線でつながっているような気がしまして、考えて見る価値があるのではないかと思っています。

それと関連して『無量寿経』の本願は、十八願が一番大事で、それ以外はあまり関係ないという感じで言われますが、そうじゃないんじゃないか。この配列の中に一見、無作為に並んでいるように見えるんですが、ちゃんとした配列の意味があるのではないかと思いまして、配列を見直してしてみたんです。これから雑誌の記事に書いていきますので、その図をご覧になって参照していただくと、私の言う意味が何となく見えてくるのではないかと思います。

ヒントを言いますと、『無量寿経』の中に何度か仏の回りを右に三回回ると出てきます。四十八願を説く前もそうです。これは大乗仏教の出発点になったと言われるイ

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

ンドの仏塔崇拝、ストゥーパの崇拝がもとにあると思います。仏塔の回りをぐるぐる回る。あるいは浄土経典がインドで成立した頃には中を回る仏塔もあったのではないかと思います。そういう仏塔の中で一生懸命仏を求めている人がいてぐるぐる回りながら考える。自分がもし仏国土をつくるとしたらどんなところをつくるか。その時代にいたとしてお釈迦様はもうおられないから、その代わりに阿弥陀様の浄土をつくるとしたらどんなものをつくるか、ぐるぐる回りながら考える。よく似た修行は平安の浄土教まで続いていました。恵信尼公の手紙で親鸞聖人は比叡山で常行三昧堂の堂僧をされていたことがわかりましたが、常行三昧はぐるぐる仏様の回りをまわっていくんです。これもヒントになっているのだと思います。この回っていくのと四十八願の配列は関係あるんじゃないかと思いました。

ただし『無量寿経』はインドで書かれまして、それが翻訳されたものですから、願数に違いがあります。普通、真宗で読まれているのは四十八願のものです。漢訳では二十四願があったり、三十六願があったり、サンスクリットとかチベットのものでは四十七願とか四十九願とかあるんですが、我々が読んでいる『無量寿経』は四十八願

なので一応それで考えてみようと思います。

一つの単純な考え方は四十八願を三等分して同じ大きさの三重の円にしてみる考え方です。こうすると第一の円の一願から十六願には浄土教で重視した名号や称名は出てきません。第二の円は十七から三十二ですが、初めに十七願が出てそこから二十願まで称名念仏に関係する願が出ます。第三の円は三十三から四十八ですが、ここではまず初めに三十四願から三十七願まで名号が出てきます。そして最後の半円、四十一願から四十八願に名号が出てきます。円が進むごとに名号の願のグループが多く出てきて、第二の円の初めと第三の円の初めは名号の願が重なり、最後の八願に行き着きます。これは一つの見方だと思います。一願に六〇年を当てると一つの円が約千年、半円が約五百年となり、千年や五百年を単位とする正像末の三時説や、五・五百年説といった歴史観と重ねやすくなります。こう読んでもいいように書かれている気がします。

また別の見方もできると思います。四十八願の中で、以前から分けるとしたら、ここが切れ目じゃないかと思っていたところがあります。最後の八なんです。ここにず

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

っと名号、「我が名字を聞きて」という名号に関係する願がずっと出てくる。如来の名前を聞いただけで悟るという感じです。最後の八願はずっと並んで、ここで切れるのではないかと前から思っていたんです。藤田宏達先生の書かれた『無量寿経』についての本を読み直したら、私が書き込みを一杯していまして、あの頃から考えていたんだなと思ったんですが、ここに一つの切れ目があるように思っています。この切れ目を重視すると、三等分ではなくなります。今の感じでは、24、16、8という切れ目になるのではないかと思っています。3：2：1になり、ある数学的な意味を持っているのではないかと思います。これを三つの円に配当すると浄土教で重視してきた名号に関する願は必ず各円の中に入っていまして、そこが特に重要な点になるのではないかと思っています。

この会場にご本尊として立派な光輪がありますが、中心を如来と考えて三つの同心円を描いてそれぞれを半径が一、二、三の円にします。コンパスで回していくと円周が2πですから円周は半径に比例して、一の円、二の円、三の円となります。ここに外側から、24、16、8と四十八願を配列するときれいにおさまる。これを時計の数

字のように右まわりに回していく。第一の円は一から二四で、この円の左に一七から二〇が出て、ちょうど真左に当たるところが一八になる。陰陽五行図と対応させると真西に当たるところです。第二の円を描いていきますと左に三四、三五、三六、三十七が出てくる。第一の円の一七から二〇の名号、称名の出てくるところのエリアの内側になります。陰陽五行図で言うと辛酉のエリアに当たるところに名号の願が並んでくる。十八願で重視された信楽がまた三十五願、三十七願で出てくる。つまり名号、称名ゾーンがあって、その中で核心になるものとして信楽を入れて、円をたどりながら内側に行き、最後の円が完成となる。そういう構造になっているのではないか。インドでストゥーパをぐるぐる回りながら内側へと進み自分が仏に近づいていく。近づきながら願を立ててできあがったのではないかと思ったんです。その人は西方に思いがあって、そこに当たるところに名号の願を並べたんじゃないかと思うわけです。聖徳太子を含めた浄土からのインスピレーションもそこに作用して、行、冥想、インスピレーションの総合として四十八願が生まれたのだと思います。翻訳段階でもそれは続いたように思えます。

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

この図でも最後の八願を単位として考えれば、約五百年単位で、正像末の三時説や、五・五百年説といった歴史観と重ねることができます。またこの図は地球から見た太陽系の図とよく似ていて、阿弥陀系の宇宙論も表しているように思います。

またこの三段階を三角形の中に配当すると、これもある規則性が見えます。いわば本願ピラミッドができます。この見方も可能だと思います。

四十八願は一見、でたらめのような感じで、一つの直線として見ると名号はここにあり、あそこにありという感じで、不整列な感じですが、あながちでたらめに並んでいるとは思えない。いろいろな見方を可能にする、実によく考えられた配列だと思うのです。正確な図を描かないと言えないので今日は予告編です。これから記事を見て下さい。

おかるさんは、僕は思うのに三五に関係があると思っているんです。おかるさんは辛酉の年、一八〇一年、日本の西の端の六連島で生まれてその島で亡くなった人です。この人は気性が激しくて島の男たちが、絶対彼女とは結婚しないと、そういう誓いを立てていたそうです。そのおかるさんがお姉さんがなくなった関係でどうしても婿養

子をとらないといけない。婿養子をもらうんです。この人が幸七さんです。しかし結婚生活はうまくいかない。夫が浮気を始める。北九州に戸畑があります。今、若戸大橋がかかっているところです。そこに幸七さんのいい女性ができてしまって、島に帰ってこない。時たま帰ってくるとおかるさんと港で激しい夫婦喧嘩が起こるんです。気性の激しい人なので、幸七さんの胸ぐらを掴んで喧嘩していたと言われています。夫婦喧嘩が堪えない。二人の亀裂は深まって夫は帰ってこない。苦しんで、おかるさんはとうとう、ラチがあかないと島に一つある西教寺の現道師に泣きついていく。西教寺は古いお寺で、初代は石山本願寺の戦いにも参加したという寺です。ところが現道師は、普通に聞くとひどいことを言うんです。「こんなことがなかったら、あんたは仏法を聞くような女ではない。夫の浮気はあなたにとってよかったんだ。」と。彼女は怒ります。しかし腹を立てて帰ったところで夫は帰ってこない。また寺に行く。そのうちに彼女は浄土の教えに心を引かれて一生懸命に聞くようになる。ところがいくら聞いてもその教えがわからない。これが次の苦しみですね。

「こうも聞こえにゃ聞かぬがましよ

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

聞かにゃ苦労もすまいもの
聞かにゃ苦労はすまいといえど
聞かにゃおちるし聞きゃ苦労・・・」

聞いたら聞いたで苦しい、聞かなくても苦しい。進退極まるわけです。こういう状態が一〇年間続いたと言われています。三五歳の時、彼女は大きな病気をする。肺炎になってしまって重体になる。当時は抗生物質もありませんから肺炎は大変大きな病気なんです。病気になって重体になるんですが、何とか意識が回復して、その時に現道師の教えを聞かれるわけです。それが三五歳。三五とは何か。『無量寿経』の四十八願で「女人往生、女人成仏の願」と言われているものです。女人に対する願が『無量寿経』に出てくるのが三十五の願です。これは勝手な想像ですが、たとえば僕がその場にいて現道師の立場だったらどんなことを言うか。多分こう言います。「お前は今、三五歳になって、生死のさかいを彷徨っている。『無量寿経』を見てみろ。三十五の願にどう書いてあるか。お前のような女を救うと書いてあるじゃないか。」「歓喜信楽」、好きな言葉ですが、十八願が「至心信楽」で、三十五願は「歓喜信楽」です。

「仏の名号を聞くと、うれしくてうれしくて仕方がない信の喜びが起こる、そう書いてあるだろう。」と。対機説法とはそういうものだと思います。

おそらくそう言われたんじゃないかと思います。四十八願を読んで女性に言うとしたら、まずここなんですね。十八願は「十方衆生」と言いますから、誰でも関係しますが、女人は三十五願なんです。中心は同じく信楽です。そう言われたんじゃないかと想像する。それが彼女の心の何かに響いた。突然、めざめが起こるんです。まさに歓喜信楽の通り、信をいただいた喜びの歌をどんどん彼女は歌っていく。これがおかるの歌と言われているもので、有名になりました。幕末に出ている『妙好人伝』があって、幕末から明治にかけて読まれた本です。そこにおかるさんの歌が出ています。『妙好人伝』はいろいろな人を載せていますが、おかるさんのところは歌だけ並んでいる。おかると言えば歌、信心の歌、そういう歌を歌った人です。詳しい歌の内容は資料に書いています。そこに好きな歌を挙げています。おかるさんの本も出ています。西教寺で出しているのもありますが、百華苑という真宗系の出版社からも出ています。

その中で特に好きな歌があるんです。前半がさしさわりがあり言えないのですが、

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

後半に「やがて浄土の花嫁に」とあります。内容を言うと、自分は散々苦労して悩んで、自殺まで考えた女だ。そういう自分を島の人は十年にわたって見ている。その間、彼女の悪口が出る。そういうふうに言われた自分なんだけど、その自分が「浄土の花嫁」になるんだ。そういう内容です。これはとてもいい歌だなと思っています。こういう歌を詠んだのがおかるさんです。

その次にレジュメに金子みすずのことを書いています。皆さんの世代は八一年以降の生まれで、八二年にみすずさんの詩が発見されたので、皆さんはみすず世代だろうと言いました。確かに八二年に発見されてよかったのはよかったんですが、私が思うにはちょっと物足りないところがあるんです。あれだけの才能がある人だったら、おかるさんのような歌がもっともっと歌えたのではないか。三十五願に出てくるような歓喜信楽の歌が、もっとみすずさんの口から出た可能性があるのではないかと。みすずさんとおかるさんとの符合ですが、下関で接点があった可能性があるんです。金子みずずさんは仙崎で生まれています。観光で有名な青海島の対岸にある漁港です。漁業の町です。お母さんの再婚相手が下関にいた関係で彼女も下関に行きました。そこ

で童謡を作りました。想像なんだけど、彼女がおかるさんのことを知っていたらきっと心ひかれたんじゃないかと思うんです。これがちょっと私としては残念です。みすずさんは、自ら命を絶たれるわけです。もし彼女がおかるさんのことを知っていたら相当違ったんじゃないか。金子みすずさんが亡くなられた理由はいろいろ推測はなされていますが、一つのきっかけは夫の浮気です。この点はおかるさんと同じです。最終的には離婚後に自分のもとに引きとった娘さんを向こう側に渡さないといけなくなった。それがきっかけじゃないかと考えられていますが、もしおかるさんのことをみすずさんが知っていたら、自分と同じ立場にありながら乗り越えて歌をうたい続けた人がいるということで、違う展開があったんじゃないかと想像しています。私はみすずさんの詩は大好きで、よく読みますが、もうちょっと生きてもらって、おかるさんのようになってもらったらどんなにすばらしかっただろうと思うんです。みすずさんには三十五の願をもっと読んでもらいたかったなという気がします。

おかるさんについて補足すると、彼女の生まれた一八〇一年は先の式に当てはめますとxが30になります。その三十願のところに書いてあることが、おかるさんがなさ

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

ったことと符合するんです。三十願は「弁才無尽の願」です。弁才天というのがありますが、言語表現能力に秀で、楽器を持った女性の天人です。本来は法をとく能力ですが、真宗で出している聖典でも「弁才無尽の願」に言語表現能力と書いてあります。この三十願がおかるさんのしたことと符合するんです。おかるさんという人は信心の歌を歌うべくして生まれた人のように思います。

四十八願に浄土の計画書が含まれているのではないかと言いましたが、おかるさんの次が本当は金子みすずさんだったのではないかという気がします。彼女の歌がすばらしいと思いながら、もうちょっと何とかならんかったかな、という気が、いつもするんです。もう言っても仕方がないことなので、あれだけでもかなりの分量なので、それだけでも味あわせてもらえばいいと思います。しかし私としては皆さんにできれば、おかるさんのような苦しみを味わえというのではないですが、三十五願の歓喜信楽の精神を生かした歌をどんどんつくってもらいたいなという気がしています。

先程の式で現代という時代を見ていきますと、これからxが丁度34くらいのところに入っていくところです。三十四願から再び名号の願が始まっていきますが、その前

の名号ゾーンだったxが17～20のところが浄土教の第一のピークでしたが、34に式をかけると二〇四一年、このあたりからのゾーンが浄土教における次のピークになってもおかしくないのではないかと思います。四十八願の中に浄土教の計画書、救済計画が入っているとすれば、これからそういう時代が始まるのではないかと思うんです。特にその時代の中でxに35が入っているように、女人往生の三十五願は重要であり、中でもおかるさんやみすずさんによって示されたように、女性の持っている歌う能力は大きな意味があるような気がします。

これまで述べたことは全て私の想像によるものですが、それによって浄土教が過去の遺物ではなく、今も、またこれからも、生きてはたらく救済の力であることを感じてもらえば、これは一つの方便としてそれなりに意味があると思います。そもそも経典そのものがこの世界にはたらく救済の力を示すための方便であったと言えるでしょう。

最後にユーミンでもう一つ好きな曲、私がひそかに親鸞浄土教のテーマ曲だと思っている曲を聴いていただきましょう。彼女が一八歳の時の、「空と海の輝きに向け

『真實心』第二十六集平成16年度2005年3月発行（京都光華女子大学）

て」という曲です。

（「空と海の輝きに向けて」）

これが彼女一八歳の時の曲です。ユーミンのデビューの時は天才少女といわれたのですが、デビューシングルはあまり売れなかったそうです。この曲はデビューシングルのB面に入っていた曲です。この後にヒットした曲があって彼女は有名になりました。しかし私は「空と海の輝きに向けて」の曲の中に彼女のほとんどすべてが入っているのではないかと思っています。仏教讃歌もいいのですが、この歌は信心の歌として響くものがあると思います。

長時間おつきあいいただきましてありがとうございました。これからホームページに詳しく出していきますので、よろしかったらごらんになってください。今日はありがとうございました。

――二〇〇四年一二月一四日――